

《半蔀》の小書「立花供養」の諸相

山中，玲子

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute
of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究

(巻 / Volume)

47

(開始ページ / Start Page)

115

(終了ページ / End Page)

141

(発行年 / Year)

2023-03-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026739>

《半蔀》の小書「立花供養」の諸相

山中 玲子

はじめに

能《半蔀》は、その曲柄を「恋の喜びを素直に描いた愛くるしい短編」(筑摩書房『能楽大事典』)、「光源氏との恋の思ひ出を主に、夕顔の女の純情を描いた小品」(平凡社『新訂増補能・狂言事典』)などと捉えられ、本曲よりも類曲の《夕顔》のほうが「構成その他において本格的に作られている」(小学館新編日本古典文学全集『謡曲集』。以下「全集」とされるのが一般的だが、その成立事情には謎の部分が多い。記録上の初出は天文十年正月石山本願寺での松囃子能で演じられた「夕顔」之蔀「証如上人日記」という記事だが、この記載自体が、現行《半蔀》にあたる能を「夕顔」と呼んでいたことを示しており、それと呼応するように、作者付資料には複数の「夕顔」または「夕顔上」の曲名が挙げられ、多くはそれぞれ別の作者に紐付けられている。本曲について考えようとすれば、こうした複数の「夕顔」、特に『能本作者註文』(二五・四年)に記された、内藤河内守作の「夕兒ノ上」との関係や、寛正六年(一四六五年)に観世の演能記録(親元日記)が見える「夕顔」との関係等を考えざるを得ない。内藤左衛門(河内守)作とされる「夕兒ノ上」を《半蔀》とする通説への異議や、『能楽作者註文』の内藤河内守に関する説自体を無条件に信じることの危険については、拙考「素人作の源氏能―内

藤河内守作「夕兒ノ上」と〈半蔀〉〈夕顔^(注1)〉以来何度か申し立ててきたが、資料に見える複数の「夕顔」や「夕顔上」と現行曲《夕顔》《半蔀》の関係については今のところ旧稿で挙げた以上の手がかりもなく、想像の域を出ようがない。

そこで本稿では、もう一つの通説——本曲は小書「立花供養」のように立花を出す形が本来の演出である——について、検証してみたいと思う。《半蔀》がかつては「夕顔」と呼ばれていたことが知られているにもかかわらず、寛正六年に演じられた「夕顔」を《半蔀》に結びつけにくいのは、能《半蔀》が冒頭に引いたように「愛くるしい短編」「小品」と捉えられていることに加え、蔀に瓢箪を飾る作り物や「本来の演出」とされる立花供養の演出が、室町末期の風流や立花の流行を踏まえたものと理解されているからだと思われる。だが、美麗な半蔀屋の作り物や立花は、本当に能《半蔀》にとって本質的な趣向だったのだろうか。

半蔀屋の作り物が重要だということは、「夕顔 半蔀之也」という記述や、古写謄本、伝書等に見える「半蔀夕顔」という曲名からも想像できるが、古くは現行の半蔀屋や半蔀門ではなく藁屋から後シテが登場する形なども在ったことが小田幸子氏により指摘されており、必ずしも本来の演出ではないかもしれないことが判っている。他方、立花の小書については十分な検証がされないまま、左掲のような説明がされることが多い。

○華道池之坊の作法による立花の作り物を正先へ出し、ワキがこれに向かい回向する小書「立花」(宝・春・喜、「立花供養」観・廻がある。冒頭、ワキが立花供養を行う旨を述べるのであるから、この立花を供養する演出が本来の形であったと思われる(立花に生花を用いることもある)。

○ワキの〈名ノリ〉からみて、《立花供養》の演出が本来のものだろう。

たしかに、ワキの科白は以下の通りで、花の供養をする旨を述べている。

「名ノリ」(ワキ詞 是は都北山紫野雲林院にすまゐ仕僧にて候。さてもわれ一夏の間花をたて候。はや安居も過がたに成候へば。色よき花をあつめ。花の供養をとりをこなはばやと存候。

□□ (色)敬つて申立花供養の事。右非情草木たりといへども。此花光陰に開けたり。あに心なしと言はんや。なかんづく泥を出し蓮。一乗妙典の題目なり。此結縁にひかれ。草木国土悉皆成仏道。

だが、《井筒》のシテが「これなる塚に回向の気色」を見せてもそこに実際に塚があるわけではなく、《天鼓》のアイが管弦講の楽器を並べ上げても舞台上に楽人が登場するわけでもないのが能のルールである。懺法で弔うと詞章にある《朝長》「懺法」や、シテ弁慶が延年之舞を舞うことが詞章から読み取れる《安宅》「延年」等、詞章に相応した小書演出が本来の演出の名残という例もあるが、これらの場合は、江戸時代に小書演出が整えられていくよりはるか前から「後出は、懺法太この事…」(樋口石見守奥書「鼓之書」朝長)のように、当該曲の本来の演出の習いとして記されているのに対し、《半蔀》の「立花供養」に関してはそのような記述も見出せない。無いことの証明はできないが、《半蔀》の詞章だけを根拠に立花供養の演出が本来のものとするのは、いささか乱暴ではないだろうか。

実は通説に反する主張は、山中とはまったく別の視点から村上湛氏「立花と能」でも述べられている(『国立能楽堂』259。二〇〇五年三月)。村上氏の論は、どちらかといえば現在の諸流の演出「立花供養」に出される立花が正統な立花ではないということに重点があり、本来の立花は「定まった不動の場所を立て、最後に水をさし露を打つことで立調を終えるものであるから、舞台上の操作にはもともと無理がある」とする。さらに、江戸時代の屋外での上演では風が吹くと花瓶が転倒する恐れがあるため、

これが御前能であれば役者は面目を失う。「立花供養」が「半蔀」本来の演出ではないかとの推量は、この一事をもってしても大いに疑わしい。(元来この小書「立花」は生花を使わず、造花の作り物だった可能性がある。)と言われるのである。但し、氏の論は直感的なもので、「立花供養」の小書についても「江戸時代後期、宝生流周辺から起った演式と言われるが、今後の調査に待つべき要素が多い」と一言触れるにとどまっている。

本稿は、氏と同じく「立花供養」は《半蔀》本来の演出ではなかうと考える者として、その「調査」の作業を引き受けようとしたものである。小書演出「立花供養」はいつ頃どのような形で作られてきたのか。現代の小書演出は《半蔀》に関する習事が成立した当初の形をそのまま継承しているのか。小書の上演にあたってどのような工夫がされてきたのか。こうした様々な問題を、資料によって考えてみたい。

一 現行小書演出「立花供養」のあらまし

「立花供養」(流儀により「立花」。以下では小書名としては「立花供養」を用いる)が《半蔀》本来の演出を反映しているか否かを考えるために、現代の小書「立花供養」およびそれに関連しそうな《半蔀》の習事について、諸資料の記事を確認することから始める。

『能楽全書』第四卷所収の三宅襄「能の特殊演出」の解説(以下「三宅解説」)には、「立花供養」について

舞台正先に立花の作物を出し、ワキはこれに向つて回向する。シテよりも寧ろワキ方の習といふべきである。挿花は老松・稚松を台に、紫苑、大菊、小菊、石竹、杜若、枇杷の葉、熊笹等その数も定まり、花生の寸法もそれぞれあつて、それに金銀の箔を置く。

とある。右に言うとおり、小書演出になった時の変更点は、立花の作り物（現在は生花が多い）を出すことの他は、主にワキの演技、およびワキとアイのやりとりに関する部分にある。「全集」には、「立花供養」の演出の場合のワキ（下掛宝生流とアイ（大蔵流）のやりとりが、通常演出の場合とは分けて掲出されているので、それに従って冒頭から後シテ登場前までの舞台進行を記せば、おおよそ以下の如くである。脇や狂言の流儀により、語りの内容や両者の関係が変わることもあるが、ここでは「全集」に拠り下掛宝生流と大蔵流の例を記す。作り物は、1の前に出されることも、3や4の後にされることもあるようだ。

- 1 ワキがアイ（能力を従えて登場。
- 2 ワキの名ノリ。
- 3 ワキがアイを呼び出し立花供養の旨を告げ、触れを命ずる。
- 4 アイの触し。
- 5 シテの中入の後、初めと同じアイがワキに声をかける。昨日まで賑やかだった供養が今日は参る人も少なく寂しいこと。前場に現れた女性についての不審。
- 6 ワキの求めによりアイが常と同じ、夕顔の上の物語を語る。
- 7 アイの求めによりワキが立花供養のいわれを語る。
- 8 ワキは「この草庵を立ち出て…」と待謡（上ゲ哥）を謡つて五条へ向かう（この点は「全集」には記載なし）。

要するに作り物以外の大きな変更点は、第一に、通常演出の場合はシテの中入り後に「このあたりに住む者」として

登場するアイが、「立花供養」の場合は冒頭から能力として登場し触れを行うこと、第二に、シテの中入り後に再び常とは違うワキとアイとのやりとりがありアイが通常の問語りをした後、ワキもアイの求めに応じて立花供養の謂れを語ること、第三に、「全集」には掲出されていないが、少なくとも現行の下掛宝生流ではアイとのやりとりの後「立花供養」の場合にだけ謡われる「上ヶ哥」があること、である。シテ方各流の現行上演を見ると、シテが花を一枝持つて出て立花に挿す演出や、序ノ舞の途中でワキに合掌する型などの変更もあるが、本稿ではシテ方の替演出については考察の対象外とする。

「三宅解説」は「立花供養」を観世・宝生・金剛・喜多四流の小書としているが、現在「立花供養」は五流で行われる小書演出である。金春流はそもそも《半部》の上演が途絶えており、天保九年の書上でも未だ所収曲に加えていないが、天保十四年五月六日（江戸城本丸での將軍家慶日光社参詣祝賀能二日目）、金春大夫が《半部》を演じた際の『触れ流し御能組』には「半部金春流中絶書上ニ無之処此度御届致候上相勤」との注記がある。^{（注3）}

ちなみに、能《半部》自体の上演状況を金春流以外についても確認しておく、と、『寛文書上』（観世新九郎家文庫蔵『御能組并狂言組』では所演曲とするのは宝生流のみだが、『享保九年書上』では観世と金剛も所演曲とし、『寛政七年・十年諸流名寄秘書』（鴻山文庫。以下では『寛政書上』）の段階では、金春流以外の四流が所演曲としている。『能楽源流考』の「演能曲目調査資料」に拠れば、江戸時代以前の記録は、先に述べた天文十年の石山本願寺松囃子能、永禄七年の矢田猿楽による松尾神社での演能、『能之留帳』が記録する文禄四年の前田利家による演能の三件である。

二 立花の作り物

「立花供養」の小書で最も目を引くのは、言うまでもなく舞台上に出される立花自体である。だが、現在の多くの

上演のように水を湛えた水盤に生花を立てる場合、それは能役者ではなく立花師の仕事となるからだろうか、その立花の作法についての記事は能の演出資料には記されていない。一方、立花を能の作り物として用意する場合もあり、その際の決まりについては、幕末から明治初年にかけての書物にいくつかの記述が見いだせる。

明治初年の金春流では《半蔀》を所演曲に加えてからさほど時をおかず、立花を出す小書演出も取り入れたようだ。金春宗家蔵『新キ書上之方 装束附』（資料A。金春安明氏の許可を得て掲出。嘉永三年）には《半蔀》の装束や「作り物 ワラ家夕顔作り花／瓢付引廻し掛」という作り物の説明に加え、巻末に「半蔀 作り物 立花」として、花籠の仕様写真参照や挿す花木の種類、寸法等を詳説している。^{（注4）} それによれば、「花先ヨリ籠下迄」、作り物の「惣高サ」が六尺、「花籠」は「高サ貳尺五寸、上口サシ渡貳尺五寸、下フクラミ三尺五寸」、「アジロ組」で「惣金箔」。そして、中に挿す植物は、

- 一、老松 高サ六尺 但内籠入貳尺五寸／壹本
- 一、若松 高サ五尺 壹本／但内貳尺五寸籠入
- 一、杜若 高サ四尺 十五本／但内籠入貳尺五寸
- 一、大菊 高サ五尺 二十五本／但内籠入貳尺五寸
- 小菊／紅白 廿有計
- 一、石竹 高サ四尺 十本／但内籠入貳尺五寸
- 但本本二付／花五輪つ、
- 一、紫苑^{シラン} 高サ有計 十五本
- 一、枇杷葉 十五本



金春宗家蔵『新キ書上之方装束附』より
「半蔀作り物立花」

一、熊笹

ク 二十本

〔資料A〕

とある。花瓶や水盤ではなく花籠を用い、それぞれの木や花の寸法、籠の中にどのくらい入れて外にどの程度の高さまで出すか、ということまで細かく書き留めているのは、これを作るのが能役者の仕事だったからだろう。造花を作るのか生花を使うのかは不明だが、どちらでも対応できたのではないか。紫苑・枇杷葉・熊笹について「高サ有計」というのは生えているものを切り集めてきた長さのままで良いと読めるし、他方で、菊・杜若・紫苑・石竹はどれも色や形がハッキリしていて造花を作りやすい花と思われる。

なお、関西の大倉流大鼓方平松甚平による『能楽習事秘事口伝留』（鴻山文庫蔵、明治17年10月から38年3月）にも「金春流半部 立華供養」の記録（シテ 高坂惣七、ワキ 春藤六右衛門、アイ 森川杜園、大鼓 大倉磐（紫）二郎、小鼓 湯浅平八、笛 春日銃五郎）があり、そこでは「作物 初メニ出ル花」として「老松 若松 薄十五本 白黄赤大菊十五本 枇杷枝 紫ラン十五本 石竹十五本 熊笹十五本」を掲げる。杜若と薄の相違や菊の種類、微妙な本数の違いなどはあるが、嘉永三年の記事とほぼ同じと言つてよいだろう。作り物の「惣丈六尺余」も同じ、「籠高サ式尺五寸／口渡り式尺／胴大キサ式尺五寸」も僅かに細身だが、同じ作り物と言えよう。

最も早くから「立花」の小書をレパートリーとしていた宝生流の詳しい作り物付は見つけられなかった。明治初年の佐渡の能役者、金子柳太郎手沢型付類の一つ『宝生流小習口伝』（鴻山文庫蔵）には「始メ正へ銀之花籠ニ松ノ真ニテ色々之花立テ出ス。台之上ニ置」との簡単な記述があるが、寸法や花の種類などは不明である。一方、昭和48年7月『観世』誌上座談会での片山慶次郎氏の発言「…家にあるのを調べてみましたら、寸法は下の花籠が一尺五寸、総丈五尺七寸から六尺五寸とあり、老松と若松を主に白菊、小菊、シオンなど、五、六種類程の花を指定してあります」

からは、片山家の附が右の金春の附と近いことがえる。流儀が違っても作り物の惣丈や花の種類はあまり変わらなかったということもあるだろうが、片山家には、先に引いた関西での金春流「立花供養」の作り物附などを参考に書き留めたものが残っているのかもしれない。

右の諸書よりも少しだけ古い、脇方の記録もある。幕末から明治初年にかけて活動した彦根藩能役者、鈴木源次郎高道の旧蔵伝書〔能楽研究所蔵『福王流脇秘事型付』二七冊〕の一冊『秘書半蔀立花供養』にも、作り物についての比較的詳しい記事が見られるのである。同書には「足利將軍の前で観世弥次郎長俊が《半蔀》のワキ僧を演じ、能ノ本義が花であることを示すために舞台上で花を立てた」という信じがたい説や、立花の各部分を能の役籍と結びつけた抽象的な論なども見えるが、立花の作り物に関しては高道自身が勤めた際の形にも言及するなど、実質的な内容も含まれており、江戸時代後期から末期の福王流の伝を伝えていると思われるので、当該箇所を以下に掲げる。

立花供養之秘事

一、夫立花供養ハ末夏初秋ノ節ノ能也。花瓶ニ正花ヲ指ス。松ヲ心ニシテ真ノ花形ニサス。^a其時ハ大小ノ前ニ台出シ其上ニ置也。又四方正面ノ立花出時ハ舞台ノ正面ニ出ス也。

一、又芦ヲ心ニサシ蓮・桔梗・仙翁花・女郎花、其外時節相応ノ草花色ドリ能ク立テ、^b是又大小ノ前ニ置。又四方正面ニ指シテ正面へ出ス也。右、蓮ヲサシ芦ノ心口伝。是、「泥ヲ出シ蓮」ト云縁ニヨル謂也。サスニモ芦ノ心トレントノ縁キレザルヤウニサスベシ。尤蓮ハ目立ツヤウ指也。

一、又花籠ノ作りものに蓮ヲハジメ時ノ草花ヲ集メサス。尤立花ニセズ、集メ花ニ指ス也。色トリ能ク七種九種、^c四方正面ニ仕立、正面ニ出ス。此形ハ「色よき花を集メ」ト云理也。

○右真草行ノ三形也。松ノ心ハ真形、芦ノ心ハ草形、花籠ニ集メ花ハ行ノ形也。

末夏初秋ノ外ノ時節ニ勤メル時ハ三形トモ作り花ヲ用ユル也。^d 尤夏ノ残花、秋ノ草花ノ作りはな也。梅・桜・椿・水仙等ハ決テ不用。

高道観世流相手ニテ勤メシ時ハ仲秋ノ下句故、行ノ形、集メ花ノ作りはなヲ花籠ノ作モノ絹ニて包み、四方正面ニ指し正面へ出せし也。

(立花供養が秘事である理由。弥次郎長俊の話。能と花の近さなど。省略)

○立花作モノハ催方より調ひ候事ハ勿論、前以ワキより花ノ指図ヲシ勤候。^e 花はワキへ持カヘル事也。但し高価ノ花故其儀前以引合置ベシ。

三つの一ツ書きで、松を真にして花瓶に正式の立花をおこなう「真」(傍線^a)、芹を真にし蓮と秋の花を立てる「草」(傍線^b)、花籠の作り物に正式の立花ではなく多種類の花を「集め花」で挿す「行」(傍線^c)の三種類をそれぞれ説明している。どの場合も「末夏・初秋」以外の演能では造花を用いる(傍線^d)というのだから、逆に言えば、季節が合っている場合は花籠の作り物にも生花を入れたのだらう。ここには寸法の指示がないうえ、真草行の説明や花の種類を謡の文句と合わせる説など、同書中の「立花」の由来や秘伝を説く箇所と同様にいささか理が勝ちすぎている印象もあるが、少なくとも末尾の二重傍線部は、高道自身の経験したこと、幕末から明治初年の実態を反映しているのだらう。花籠を絹で包み、立花ではなく集め花の形式で、しかも季節が初秋ではなく晩秋だったので造花を用いたというのである。また、傍線^eも興味深い。立花の作り物の準備は主催者側の責任であること、しかしおそらく花の種類や本数などはワキ方からあらかじめ指示をしていたことが読みとれる。これは他書には見られない説だが、「花は高価だから持ち帰るのに前もって確認しておけ」というような非常に世俗的で具体的な注意とともに書かれている

ことから、少なくとも高道の周辺での実態は伝えていると考えてよいと思われる。

三 ワキ方の習い

先の三宅解説では、「立花供養」はワキ方の習いであると言っていた。書上類の記述（後掲）を見ても、また、「半蔀立花ハシテノ方ニ一向習なし。脇方ノ習也」（早稲田大学演劇博物館蔵『下掛宝生流脇仕方付奥伝』）、「シテ替事ナシ」（前出『宝生流小習口伝』）のような発言からも、本来「立花供養」が脇方の習事であることは間違いなさそうである。『寛政書上』で初めて「立花」「立花供養」の名が登場する際も、左のとおり脇方の演技に関わる習事として書き留められている。

○シテ方宝生流 「半蔀 立花 右之節中入二脇語り有」との記述あり。

○ワキ方高安流 「軽キ習事之分」に『半蔀』を挙げ「立花供養之節は重キ習ニ御坐候」と注記。

○ワキ方宝生流 「語」の一覧の中で「源氏供養 半蔀」の二番を「右若年ニ而は相動り不申候」とする。また

「小習事之分」に「半蔀立花」を掲げる。

○ワキ方福王流 「立花供養」についての言及は無し。「語目録」の内「右拾一章格別習ニ仕候」という十一の語
 リの末尾に『半蔀』を含める。（注6）

つまり、シテ方の宝生流とワキ方の高安流・宝生流が「立花」または「立花供養」の名を記し、ワキ方の福王流と宝生流は『半蔀』の語りを重い習事になっている、ということである。シテ方宝生流は「立花」の習いとワキの語りを結びつけているが、ワキ方の記述では、少なくとも『寛政書上』の段階では「語り」と「立花」とを必ずしも結びつけているとは言えないようだ。

では、ここで言われている「半菀立花」という小習事や「語り」の実態はどのようなものだったのか。「立花」または「立花供養」が習だと言っているワキ方宝生流と高安流の伝書の記事を見てみよう。以下に、『下掛宝生流脇仕方付奥伝』(資料B。早稲田大学演劇博物館蔵)と高安流の『鶯永集』(資料C。能楽研究所蔵)の記事を、続けて掲げる。Bは寛政七年から十年頃の記事を多く含み、右の『寛政書上』とはほぼ同じ時期のものと思われる。Cは江戸後期の筆写で元禄・宝永頃の内容とされている(能楽研究所『蔵書目録 附解題』)。

○半菀 建華ノ事

一 初テ脇出テ端ノ名乗常ノ通ニテ狂言呼出シセリフ有濟テ太コ座へ行、クツログ。此所ニシテ後見作物立花持出、^②
階子ノ所ニ置、後見引テ脇立、常ノ通真中ニ下二居、サシヲ謡。中入前常ノ通也。

論議済、作物常ノ通出テ待謡三輪ノ様ニスル。左ノ通也。

(二重傍線部のゴマ点・所作省略)

此草庵を立出て。打切 く。五条あたりに尋ね行、小家がちなる軒の草、花のあるじはいかならん、く。

「有し教に」ト常ノ通ニ謡、跡仕方常ノ通 尤建華ノ時ハ是非待謡有^③

狂言泉流ノ時ハ名乗済(右脇に朱で「泉流ニ而者相手断候事」と注記)、「いかに能力」ト呼出シ「今日花の供養をなさふずる間」ト云付、太コ座ニクツログ、狂言建華ヲ持出置事モ有。右ハ当時無之事也。何レニテモシテノ後見ニ出サセ^④ル事也。

(朱)当流ニ而者太夫花ヲ持出、三世の仏に花奉るト云乍作物ヘサス、此時脇アシライ、ケ様ニ扣有由なれ共、宝生ニ右ノ扣無之由、師家御申伝ノ事

〔資料B〕

半部

一 立花ノ作物出ル時ハ立拝シ「いかに誰か有」トフミマワシ狂言ヲヨビ出ス。「色ヨキ花ヲアツメ候へ」ト云テ太コ座へハイリ居ル。狂言フレ畢アルト立花後見持出、舞台サキ真中ニヲク也。其時ワキ立テ立花ノ前間半程アケ下二居、諷過テ脇座ヘナヲリ下二居也。立花ナクテモツバクトキニハシテモヨシ。

〔資料C〕

先の『寛政書上』ではシテ方宝生流が「立花のときはワキの語りが入ることが習いだ」と言っていたが、右のB・Cではワキの語りのことは何も触れられていない。B（下掛宝生流）からは、①常と違いアイを呼び出すこと（触レについては記述なし）、②ワキが太コ座で下居している間にシテ方後見が立花の作り物を出すこと、③後場に半部屋の作り物が出ると立って、常にはない待謡「此草庵を立出て…」を謡うこと、④和泉流の相手の場合はアイが立花を持ち出すことがあったが今はこの演出はやらないこと（この件については次項で検討するなど、「立花」の具体的な内容が読み取れる。傍線①は朱筆の注記で、元は「直ニ太コ座へ行」とあった「直」に朱で○印を付け、このように訂正している。末尾の朱注部分は、ワキ方宝生流には「シテが作り物に花を挿す時にワキもあしらう」という教えが伝わっているが、シテ方宝生流にはそのような型がなかったという話だろう。語りのことが出ていないのは、Bが弟子家である尾上家に伝わったことと関連があるのかもしれない。小習事の「立花」は、本来、一子相伝と言われる重い習事の「語リ」^{（注7）}以外の部分、主として間狂言とのやりとりや、常には無い待謡を入れることなどに関する習いで、弟子の尾上家には小習の部分だけが伝えられたということも考えられる。

もう一方のC（高安流）では、①常と違いアイを呼び出し触レを命ずること、②ワキが太コ座に下居している間に触レを終えた狂言方が立花を持ち出し置くこと、③ワキは「敬白…」の謡が終わってから脇座に戻ることが言われる。①

はBと同じだが、②はBの④とは反対の説で、しかも波線の「真中ニラク也」は元は「後見持出：真中ニラク也」とあったのを、「後見」を朱で消している。これは、昔は「立花ノ作り物を後見が（出して置く）演出だったが江戸後期には狂言方が出すようになっていたので「後見」の二文字を削除したのか、もっと前の元禄・宝永頃に原本の段階で訂正が行われたのか、判断できない。Bでも和泉流の相手と大藏・鸞両流相手の時では違うようであり、シテ方の後見が出すのか狂言方が出すのか、主張の割れる箇所だったようだ。CはBのような特別の待謡には触れておらず、そのうえ、たとえ立花が出なくても、「ツヅクトキニハ」この型をしても良いと言う。《半蔀》の演能が続くというのは考えにくいから、「同じようにワキが脇座で座ったまま経文などを唱える能が続く時には」というような意味と思われるが、どちらにしても、ちょっとした替の型のような扱いで、『寛政書上』の「立花供養之節は重キ習ニ御坐候」とは違う印象である。こうしたアイとのやりとりや舞台上の便宜的な所作に関する所伝は、本来はそれほど重い習いではなかったようだ。

あらためて確認しておく。B・Cに共通する「立花供養」の場合の変更点とは、アイが冒頭から出ること、立花に向かつて合掌するのでワキが「敬つて申す…」と謡う位置が脇座ではなく太鼓座になること、の二点である。またワキ方宝生流の場合は常には無い待謡（上ゲ哥）が入ることも習いである。B・Cとも、語りについては触れていない。

では、『寛政書上』に福王・宝生両流が掲げていた「語り」についてはどのような伝承が残っているのだろうか。先にも作り物に関する記事を引いた鈴木源次郎高道書写の一群の資料（能楽研究所蔵『福王流脇秘事型付』のうち「八番語／附別二番語」（資料D）には、『寛政書上』（福王流は寛政七年提出）の十一曲とは多少出入りのある十曲が、「芭蕉草木成仏之語」「源氏供養表白語」「朝長大崩語」等、「語り」の内容を示す名称付きで挙げられており、そこに《半蔀》「夕顔ノ上語」も収められている。以下にまずその語りの詞章を掲げ、続いて、D所収の語り前後のアイとのやりとりや舞台進

行を記す「八番語りセリフ書」(資料E)から、関連箇所を引く。

半蔀 夕顔ノ上

抑光源氏。六条アタリ御忍ビアリキノ比。大弐ノメノト尼ニナリケルヲ訪ヒ給ハント。或ルタツ方五条ワタリエ尋サセ給フ。御車ノ入ルベキ門ハサシタリケレバ。人ヲ帰サセタマヒテシバシ待セタマフガ。アタリニ檜垣アタラシウシテ。上ハ半蔀四五間バカリアゲワタシタルスダレノ内ヨリ。イト白キ透影アマタ見エタリ。其家ノ軒ノツマニ。白キ花ノ心ヨゲニ咲タリケルヲ。維光ヲ召テアノ花折りテ参レト宣エハ。維光承リ。押明ケタル門ニ入リテ折ントセシニ。内ヨリキヨゲナル生絹ノ一重ナルハカマ(口伝)長クフミシダキタル童女ノヲカシゲナルガ。扇ヲヒラキテ。コレニノセテ参ラセ給ヘトアリ。

維光頓テ其扇ニノセテ奉ル。源氏トリアゲテ見給フニ。白キ扇ノツマイタウコガシタルガ。手ナラシタルウツリ香イトシミ深くナツカシキニ。墨モ干ヌバカリノ哥有。「心アテニ夫カトゾミル白露ノ。光そへたる夕顔ノ花」ト。ヨノツネナラズ書スサミタリ。

是ハソモイカナル者ノ栖トトハセ給ヘバ。「モノ、助ナリケル人ノ家ニテ候ヒシガ。ヲノコ田舎ワタライシテ女(メ)ナン同腹ナド宮仕へ人ニテヨリく来通」ト申ヘバ。源氏イト御心マドワシナガラ。御懷ヨリタトウ紙取出デタマヒテ。「折テコソ夫カトモミメタソカレニ。ホノく見ヘシ花ノ夕顔」。此御哥ヨリ御心解サセ給ひて。互ノナサケ深カリケリ。彼夕顔ノハナヲカゴトニ馴レおはしますにより。夕兒ノ君トナン申セシト也。然るに此事御息所にもれきこヘネタマシク思召ケル思ヒヤ通ヒケン。夕兒ノ上我レカノケシキニ悩ミ給ひて。終に失サセ給ふト承リ候。

然れはイニシヘノ妄執今ニ残つて夕兒ノ花ノセイトアラハレカクマミエ給ふト思ひ候間急ギ五条渡りへ立越ヘ

彼夕兒ノナキアトヲ弔ヒ申サバヤト存候。

〔資料D〕

夕顔之上語

一 (中人狂言よりカ、ルシカ)。さん候、只今あらはれたる女をいかなる者ぞとふしんをなして候へば、「何某ノ院にも常はさふらふ、誠には五条あたりの者」と云捨、立花のかげによると見て、姿を見失ひて候。是につき、思ひ出したる事の候。我兒にて有候時、源氏物語を承り及て候間、夕兒の上のあらまし語て聞せ申そうするにて候。シカ。

(語ト)終に失させ給ふと承りて候。ナンボウ(狂言ニ)哀成物語にて候。シカ。

古しへの妄執今に残り、夕兒の花の精とあらはれ、かくまひ給ふとおもひ候間、急ぎ五条わたりへ立越、彼ゆふがほのなき後をとひ申さばやと存候。

〔資料E〕

右に掲げたDの語りは傍線部のような文言を入れることによって、立花供養の場に夕顔の霊が顕れたことの説明としているが、それ以外の点では『源氏物語』夕顔巻の内容、すなわち源氏と夕顔の恋が始まる経緯について、交わされた和歌も含め正確に述べており、Eの傍線部で「稚児の時代に源氏物語を習った」という僧にふさわしい語りである。中世・近世の学問で『源氏物語』などの伝授が行われていたことなども考え併せれば、ここで「夕顔」巻の正確な内容を語ることが秘事秘伝になったことは十分納得ができる。

『寛政書上』で「小習事之分」に「半部立花」を掲げるワキ方宝生流も、それとは別に「語り」の目録を記し、その中で、「源氏供養 半部」の二番の語りを「右若年ニ而は相勤り不申候」としている。こちらはどのような語り

だったのだろうか。若い内には演じられない重い習いの語りとして、同じく『源氏物語』関係の《源氏供養》と《半蔀》の二曲が並んでおり、同時代の福王流に「夕顔上之語」があるのだから、こちらも『源氏物語』の内容を語ってもよいと思うのだが、そうではないらしい。現在の下掛宝生流において《半蔀》で語られる習いの「語り」と言えば、「立花」の小書の際に立花供養の謂れについて語るものだけで、源氏物語に関する語りは見つからない。その立花供養の謂れの語りも、古い資料には具体的な内容が見出せないのだが、次に掲げる『隣忠秘抄』（資料F。能楽史料第四編）の説は、立花供養についての語りにそれなりの古い歴史があったことを示唆している。

此能景氣ある能なり。脇に立花の事語るもありとなり。今は世上に用ひずと。作物の外に立花を出すことあり。正面カマチより一尺程手前に置く、尤も花台に載せ出す、中人に取る。

予若き時、御中屋敷にて半蔀仰せつけられ、立花出す事ありやと御尋ねにて、有之候と申上げれば、御立花師に仰せ付けられ、出して仕る。將軍様御代の事、則ち御前にて相勤め候。
〔資料F〕

二重傍線部は全体が伝聞の記事である。また、ワキが「立花の事語る」演出は必ずしも立花を出す演出と結びついてはいない。ワキの語りと立花を出すことは、独立した二つのオプションとして述べられている。ついであるが右の記事の後半は、隣忠が若い時（八代將軍吉宗の時代、紀州藩中屋敷にて吉宗から《半蔀》に立花を出す演出について下問があり、在ると答えた結果、立花師が立てた花を舞台上に出し、吉宗の御前で演じた、という話と読み取れる。享保の頃、立花を出す替演出が普通には演じられていなかったからこそ「御尋ね」であろうし、一方、そういう演出があるという伝承が途絶えていなかったことも判る。正式な替演出として書上類に記すようなものでなくても、上つ方の要望

により立花を出しての演能というのはあり得たのだろう。現在の通説が「詞章にあるのだから立花を出すのが本来の演出」と考えるのと同様に、詞章にあるのなら立花を出して見てみたいという要求は当然あったものと思われる。先に怪しげな説として引いた、足利將軍の前で《半部》を演じ、ワキ僧役の長俊が花を立てたという話も、作り話ではあっても、隣忠の経験のように貴人からの要望で上演した記憶を反映しているのかもしれない。

立花の語りに話を戻す。恵阪悟氏は、ワキ方の語りの習いに関する^(注9)論考の中で『福王家宝物目録記』^(注10)の記事を引き、福王流の八世盛有が鷺二右衛門に送った文書の控えに

一、敦盛 懷旧之詞／脇秘語 同盛有筆

一、半部花の秘 同筆

とあることについて考察している。氏はこの「花の秘」を「名称というよりは、内容が秘伝であることを示す注記のようなもの」と解釈しておられるが、少なくとも立花供養に関する習いではあるように思われるし、もう一歩進んで、これが立花についての語りだったという可能性も考え得るのではないだろうか。そのように考えた場合は、福王流では《半部》の中での語りが変更されたことになる。元文三年に七六歳で没した盛有は隣忠より少し先輩だが、両者の活動時期は重なるので、たとえば盛有の書き留めた「花の秘」について、晩年の隣忠が「立花についての語りがあったと聞いているが今は演じない」と言ってもおかしくはない。

だが、福王流の「花の秘」が「立花の事語る」習いだったとしても、その内容は伝わっていない。逆に、先述のとおりワキ方宝生流には『源氏物語』に関する語りは伝わっておらず、立花供養の謂れを述べる語りだけが伝わっている。先にこの語りは元来一子相伝と述べたが、現在では、幸い「全集」に下掛り宝生流の「立花供養」の語りが掲載されているので、以下にその文言を引く。

この立花供養と申すは、仏在靈山の昔、四梵居士といつし者、千草の花を集めて、金輪天花の古を思ひ、仏に供養せしより始れり。されば一花の小善も真如の冥利に基づくといへり。今も四時運行の理を慕ひ、四季折々の百草の、花の色香のそれぞれに、三世の仏に供養せし、類へだてぬ花の縁に、人間愛着の迷ひを翻し、天花快樂の境涯に至る、草木国土悉皆成仏の結縁たるべしとて、一夏の間立花の供養候ふは、なんぼうありがたき事にて候はぬか。

この語りのうち、立花供養の謂れについて述べているのは傍線部のみである。「四梵住」「四梵行」という言葉はあつても四梵居士という人物が供花をおこなつたというのは、權威のある仏説ではないだらう。全体の分量も他の習いの語りに比べて少ない印象である。各流儀で何を習いにするかは独自の主張や伝承があることで、それをむやみに侵すべきではないと思うが、《朝長》《船弁慶》《芭蕉》等の習の語りから区別されて「若年にては相勤めぬ」語りとして位置づけられているというのは、容易には納得できない点でもある。

福王流の「夕顔之上語」と宝生流の立花供養の謂れについての語り、どちらが本来のものなのか、それとも初めから流儀によっていろいろな語りがあったのか、判断が難しいが、そもそも、なぜ「立花供養」にワキの語りが入るのだろうか。最後にその点を考えつつ今まで見てきたさまざまな説を整理し直してみることとする。

四 誰が何を語るのか

前述のとおり、通常演出の《半部》ではアイは北山辺りに住む者である。不思議な女が姿を消した後、大蔵流の場合はワキから「どこからいらした方ですか」と声を掛け、鶯流の場合は狂言の方からワキに声を掛けて、会話が始ま

り、ワキ僧の求めに応じてアイは夕顔と源氏の物語を語る。それが「立花供養」になると、立花を運び出すためにアイは冒頭から能力として登場することになる、というのがさまざまな習事の生まれる前提にあるのではないだろうか。資料Bは、狂言方が立花を持って出ることに対する反対し、その形をとる和泉流とは相手をしないと記していたが、立花師が舞台上で花を立てるのではなく作り物としての立花を持ち出すのであれば、それは本来、狂言方の仕事だったろう。作り物ではなく正式な立花の場合でも別の場所で立てた花を舞台上に持ち出すのは、やはり狂言方だったはずだ。そもそも後見の役を狂言方が務めていたことはすでに小田幸子氏の指摘によりよく知られている。^(注11)

その場合、「いかに能力」と呼び出し、立花を用意して人々に触れよと命令を下した僧が、後になってその同じ能力に、常の演出のような形で『源氏物語』について尋ねるのは、いかにも不自然である。先に見た資料C^(高安流『鶯水集』)は

「いかに誰か有」トフミマワシ狂言ヲヨビ出ス。「色ヨキ花ヲアツメ候へ」ト云テ太コ座へハイリ居ル。狂言フレ
畢ルト立花持出、舞台サキ真中ニヲク也。

と、能力に命じて立花を運び出させる演出だった。土地の人がその土地の伝説を、余所から来た旅僧に語る、といのではなく、雲林院にいる能力が夏安居の僧に『源氏物語』の内容を語ることの不自然さは、容易に人々の気づくところとなっただろう。能力に立花を運び出させたなら、語りはワキが引き受けるしかなかったのではないだろうか。

同じく先に見た資料Bでは、和泉流相手の時に「狂言建華ヲ持出置事モ有。右ハ当時無之事也。何レニテモシテノ後見ニ出サセル事也」と言っていたが、シテ方後見が立花を持って出ても、

「いかに能力」ト呼出シ「今日花の供養をなさふずる間」ト云付

というやり方では、ワキとアイの関係は変わらず、能力に僧が『源氏物語』のことを教わる不自然さは消えない。

時代が降るにしたがつて、そうした不自然さを回避するための工夫がされたようだ。たとえば前出の鈴木源次郎高道筆『秘書 半部 立花供養』には、次のように、冒頭に出るアイを能力ではなく雲林院門前の人とする演出が記されている。

一 名乗スギ、フミ廻リ 橋カ、リ方へ行、門前ノ人ノ渡リ候カ シカく、サン候。早安居モスギ方ニナリ候ホ
 ドニ花ノ供養ヲ致サフズルニテ候。 急ヨキ花ヲ集メテ給リ候へ シカく、又望ノ人候ハ供養ノ場工御参アレト
御フレアツテ給リ候へ シカく、

座ニ行下ニ居、扱立花出し狂言脇ノ方へ来リ、花ヲ立、触申タルヨシ云。…(中略)…扱シテ出、流儀ニヨリ夕兒ノ花ノ枝持出、立花ニ指ス形在。其時ハ、「不思議ヤナ今までハ」ト作モノヲシカト見てイカナル花ヲトシテニ向也。中人。ワキノ語有時ハ狂言ノ間語ハカタラサヌ事也。^b (以下、後場の記述省略) 〔資料G〕

ここでは、狂言方が立花を出したのか後見が出したのかハッキリしない。傍線 a からは狂言方が立花を出したように読めるが、それでも □ で文字を囲った部分から、このアイがワキ僧に使われる能力などではなく、ワキ僧が敬語を使う相手であることが判る。傍線 b には、ワキの語り(夕顔之上語)があるときは間語りは無しにするとあるが、もしもワキの語りが無い場合でも、門前の者がアイならば、改めてアイに『源氏物語』の話聞いてもおかしうはないだろう。ちなみにこの伝書は右の記事に引き続き「狂言トノ世流布左ニ記」として、明治四年に高道が和泉流野村又三郎と相手をした際に細かく申し合わせた形を書き置いているが、やはりアイは門前の人で、ワキは先にも引いた「是につきおもひ出したる事の候。我児にて有し時、源氏物語を承り候間、夕顔の巻のあらまし語てきかせ申さうずるにて候」という前置きの後、自分の方から「夕顔之上語」を語ったようだ。

ワキが『源氏物語』ではなく立花供養の謂れを語る宝生流の場合は、能力に『源氏物語』を語らせることに関して

どのような工夫がされているのだろうか。「全集」から引用した現在の下掛宝生流と大蔵流(注12)のやりとりでは、まずワキがアイに夕顔の話を尋ね、アイは「さやうのことは僧都こそご存知あるべきを、われらへお尋ねは、御慰みと存じ候間…」と言いつつ語り、「さてまた僧都へ尋ね申したき…」と立花のことを尋ねる、という流れになっている。「ご冗談でしょう」という前置きをするということだ。こうした台詞は、常の演出で北山辺りの者が夕顔のことを語る際には入らない一言である。そしてこの工夫は、幕末の内容を伝えたとされる『鷺流能間』第七冊『替間 下』の「半蒨立花」でも成されている。同書掲載の台詞の冒頭は、

御前に候。

畏て候。

皆々承り候へ。今日立花供養を成さるゝ間。色よき花をまいらせよとの御事なり。志の輩は何れも御参りあれ。其分心得候へく。

となっており、ワキの台詞は無いが、「御前に候」「畏て候」は能力の台詞だろう。その能力に夕顔の物語を尋ねたときの反応は右に引いた大蔵流と同じだが(傍線 a)、物語自体にも、ワキの語りとは違う狂言らしさを加えているように思われる。

(ワキに声を掛ける部分省略) …是は思ひもよらぬ事お尋有物哉。さ様の御事は此方にてぞ御存有べきに。かへつて我らにお尋ねあるは、お慰の為と存候間、^a 承り及びたる通り物語申そふずる。

去程に夕顔の上と申すは…(省略。五条辺に隠れ住むところを光源氏に見いだされる話) …夫よりなにかと方便て。源氏をかよはせ申されたるに。此五条あたりの事なれば、^b となりには物語ふとて夜深より御嶽せうじの御声、其外世を渡るしづの営み申す。万物騒ぎ事を六ヶ敷思召、何某の院へ伴ひ御申有に。路次すがらの哥どもあまた有げに候へども、

夫迄は聞も及ばず候。^c

先我等の存たるは斯のごとくにて候。扱又一夏の間立花を供し給ひ。花の供養を遊され候事、我等杯はいまだに子細を存ぜず候間、そと物語あれかしと存候。^d 心得申候。

御物語を承り、いよ／＼信心も弥増ありがたう存候。 是は寄特なる事仰らる、物哉。さらば是より五条へ御

出ありて。夕顔の跡を御弔ひあれかしと存る。 心得申候。

〔資料H〕

傍線bは、ワキの語りでは触れられない五条辺りの庶民の暮らしの描写を加え、しかも『源氏物語』本文とは少し異なる軽い揶揄のニュアンスを加えている。傍線cで「和歌のやりとりは知らない」というのも、ワキの語りとの差別化を図つてのことと思われる。このようにして狂言らしく夕顔の物語を語った後に、傍線dで立花の話を探ねている。もちろん、どんなに狂言方らしい工夫をしても、アイが『源氏物語』の内容を語ったうえでもう一度ワキに『源氏物語』のことを尋ねることはあり得ないので、もしもワキが福王流で「夕顔上の語」を語る場合には、Gの言うようにアイには語らせない、というやり方をするしかなかったのではないだろうか。

以上、立花供養に関する多種多様な演出のありかたを見てきた。立花は本当の立花か作り物か。作り物に挿す花は造花か生花か、アイ狂言は能力か僧が敬語を使う相手か、『源氏物語』の話はワキがするのかアイがするのか、立花の語りと夕顔の語りはどちらが本来か。そして、立花供養は《半部》本来の演出なのか。様々な有り様については資料の「調査」の結果は示したつもりなので、最後に、途中でバラバラに述べてきたことをもう一度まとめつつ、現段階での推測を述べたいと思う。

まず、立花供養が《半蔀》の本来の演出ということは、無いと考える。理由については冒頭にも述べたが、加えて、《半蔀》は古くは「夕顔」とも呼ばれており、現行《夕顔》と区別するために「半蔀夕顔」と呼ばれるようになったという経緯がある。本当に立花が本来の演出で常に出されていたのなら、題名にでもあるいは何かの伝承でも残っているはずだろう。それでも、資料Fからは、花器に水を張るような形での本当の立花を舞台上に置き能を演ずることも在ったことが判る。ただしそれは、シテやワキが望んで演ずるのではなく、隣忠が吉宗の命令で演じたように、「催方」である貴人のリクエストに応える形の特別な場合だったと思われる。それは、能役者の側で替演出として工夫され伝えられた習いではなく、その時々、一回限りの、外発的なものだったろう。

その場合、その一回限りの特別演出にふさわしい工夫として、ワキが夕顔の物語ではなく立花供養の謂れを語るという習いの方が、まず先に在ったと考えてよいのではないだろうか。資料Fの「脇に立花の事語るもありとなり。今は世上に用ひず」という記述から、享保の頃に立花を舞台に出して《半蔀》を演じたことのある徳田隣忠でさえ伝聞でしか知らない古い習いとして、「ワキが立花のことを語った」という言い伝えがあったことが判るのに対し、夕顔上の物語をワキが語るといふ習いは寛政年間まで見いだせないのである。一方、現行下掛宝生流の「立花供養」の語りの短さやその内容からは、これが何か特別に重い習いとして作られたのではなく、本来は、せっかく立花を飾った舞台で演ずるのもっともらしいことを語る、というようなものだったのではないかとも思われる。隣忠と活動時期の重なる福王盛有筆の内容不明の文書「半蔀花の秘」も、そのような立花に関する簡単な語りに関するものだった可能性もある。

福王流にまったく別の「夕顔上」の語りがあるのは、先にも述べた、ワキとアイとの関係と関わっているのだろう。書上に「立花供養」の名が見えるのは寛政年間だが、そうしてレパートリーに組み込まれるまでの間には、立花の作

り物（造花という意味ではない）を作つて出すようになっていた。《道成寺》の鐘供養の場に能力が鐘を運び出すように、重く丈の高い立花の作り物を舞台に運び出すのは、常の《半蔀》には登場しない能力役のアイの仕事となる。だが、その場合、雲林院で供花の法要をするような僧が、下働きを命じた能力に何かを尋ねて問語りをさせるのは不自然なので、代わりにワキが、これも《道成寺》と同じように語りを担当するようになったという経緯が想定できる。その際、ワキ僧がアイの能力に語つて聞かせる内容としては、立花供養の謂れでも『源氏物語』の内容でもおかしくないが、福王流では、《半蔀》の内容によりふさわしく格式も高い『源氏物語』に関する語りを新たに工夫したのではないかと思われる。逆に言えば、もし立花供養の謂れについての語りがもつと正確に供花の来歴を説き、権威あるものとして伝えられてきたなら、夕顔上の語りが作られる必要もなかったのではないか。立花供養の語りが短く軽い内容に見え、それでいて重い習いになっているのは、作品の本質に関わるような工夫ではない一回限りの、しかし貴人からの命令に対応するための語りだからではないだろうか。立花を出す演出が《半蔀》本来のものであつたなら、このようなことは起こらないはずである。

ワキ方の重い習いである語りを見ると、《朝長》の「大崩之語」、《敦盛》の語り、《道成寺》の語りなど、ワキが自分の体験したことを語るか、あるいは《芭蕉》の「草木成仏」や《源氏供養》の「表白」のように仏教に関する深い知識を披露するものが多い。本曲の場合、ワキ僧は光源氏ではなく、夕顔のことを語るには稚児時代に学んだとの説明が必要だった。一方、立花供養（供花）の謂れを語つても、その来歴自体の根拠が薄弱なうえ、源氏と夕顔の恋という一曲の主題と直結はしない。要するに、古い歴史を持つていそうだが内容は本説正しいとは言いがたい立花供養の謂れと、内容は正確で重い習事として記録されているが後発の可能性のある夕顔上の物語、どちらかがより優れた工夫とも言いがたいのである。同じ《半蔀》の、しかも同じ小書「立花供養」の際の重い習事である語りの内容が、ワ

キ方の流儀に拠って全く異なるという珍しい現象の背景として、最後に記しておく。

《半蔀》が立花の流行を背景に、立花供養の様を舞台上に見せることを目的の一つとして作られたのではないのなら、本曲の主題は何なのか。稿者はかつて、《半蔀》のシテとワキの描き方が、救いを求める霊と申う僧という関係からは逸脱しており、このワキには光源氏のイメージが重なって見えると述べたことがあるが、この能がいつどのような興味で作られたかということは、代々の役者たちが工夫を重ねてきた小書演出とは別の問題である。本稿は小書演出の整理に留め、《半蔀》の主題や《夕顔》との関係については別稿で考察することとしたい。

注 1 国文学解釈と鑑賞別冊『文学史上の『源氏物語』』（至文堂。1998年6月）所収。

2 小田幸子「能の舞台装置―作り物の歴史的考察―（下）」（『能楽研究』13号。1988年3月）

3 国文学研究資料館「連歌・演能・雅楽データベース」による。

4 書上類でも鴻山文庫蔵『習事附目録』に収められる「安政四年五月宮谷映書上」に「○半蔀 立華供養」と登場し、「○印之分此度書加」と注記されている。

5 上演日時は不明で素姓の判らない役者もいるが、春藤六右衛門が没した明治26年以前の記録。

6 「弓語 隅田川長語 道成寺語 船弁慶語 敦盛語 芭蕉語 忠度語 誓願寺語 源氏供養語 朝長語 半蔀」の十一曲。

7 「第四回下掛宝生流能の会」（令和五年四月二十九日）チラシには、「立花」の語りにつき「元来一子相伝とされる大事な語り物で、現在まで大切に取扱われてきました」と説明があり、番組の小書も「立花供養」と「脇語」が二つ並べられている。

8 奥書によれば、福王盛章が寛政十二年に記した本を高道が天保八年に書写したもの。

- 9 恵阪悟「福王流「脇語」の名称をめぐって」〔國文学〕92。2008年3月。
- 10 伊藤正義「『福王家宝物目録日記』について」〔人文研究〕37巻7号「塚原鉄雄教授退任記念号」1985年3月。翻刻も掲載。
注2の論文参照。
- 12 現在も下掛宝生流と和泉流とは「立花供養」の相手をしないとのことである（宝生欣哉氏談）。
- 13 「能《半部》のワキ」〔むらさき〕58輯。紫式部学会。武蔵野書院。2021年12月。